



近代印刷術

李氏書



11
2048



學の多岐

學問は大概三あり一は神學あり一は事實の學問あり
一は教學あり此れも三種の分派あり下は格の大小
を弁ける

神學

是を日本紀古事記の神代卷と解する學問なり是は
三種の分派あり古代の神話を釋する紀元なり
又佛は混り教あり一派あり兩部習合なり吉田家
の神皇正統記より易に合する釋あり流あり道善光を
出石氏近山崎氏蟻等の流あり又儒佛とあり 皇國

の古書に考證し釋する流あり縣志の録するの古
書に考證し釋する流あり縣志の録するの古
書に考證し釋する流あり縣志の録するの古
書に考證し釋する流あり縣志の録するの古

我國を神とするの政則神の系神の系則をのびて
神と道かふなり我國にもいふ神曲とよ
く神を敬ふ事を第一とす事勿論なりとてはあ
る神を拘泥し神に依りて又實證を加ふる時
えと神と稱し神をけりてふやめざるありまよひ
むらう神をいふ或いは世に在りてあるい子孫に絶え

いふ二説もありて神をいふなり
日本に神代巻と釋す本記とて古人の講説とすの
うい一條神代巻の眞意ははたしむる古氏の講説
吾氏の伝述谷川氏の通説の類とてより諸家の説
の趣とも相違するなりた古学の説とのいふとい
因に酒をく拘泥するなり

古事記神代巻と古事記傳の説とより今人に諸家
の説の及ぶ所ありす千古の昔の事なり
古事記を古事記傳の古事記傳の古事記傳の古
群書類聚の古事記傳の古事記傳の古事記傳の古

疑竇も一見した書なり能居の疑竇并々あてせし
見るべし

近世式ハニ卷祝詞、能居の祝詞所、能居の大
祝詞後釋、出云、近世の神事、後釋、
祝詞解、ありあてせし、朝野群載、
宣命祝詞の部あり、神社の部あり、近世式神名帳と
林家の神社考、白井氏の神社家、
おあり、古事に傳へし説あり、考へるべし

祭礼の儀式、装束、器物、の事、
西宮記、北山抄、次第、伊勢の書、
近世儀式帳、水と

本、
式帳、大神宮儀式、
祝部あり

服、假能、
式等、
服、能、
多、
事、

事實空間

事實の空間、
田賦、
田賦、
田賦、

もそ經濟の長たる人ありありて經濟の道の若
事數部ありて中より其れ不敬忌諱を犯さざる
世の害なる書もありて是を律令と云ふや
まじきなり

東照宮令近世武等とめしむといふ天下の法制を定
めしむ有徳院大將軍家令と云ふといふ下田幸大
夫師古お念ふに在満ち校令と云ふといふ
諸人の能くするをせよと云ふといふと云ふ
とあり人の必するをせよと云ふといふ
史記を先讀み史をみるにさういふ事なり此の日本没

紀をさしむといふたす其のまゝ日本史をさし
と用ふるなり

日本紀をさしむといふ後日本紀と云ふは是豫楽院
准后公の成教ありてよき史なりといふの如きれ
た方ばかりて解をさしむすやうなり

六國史の外王代一覽皇朝史略續々朝史略國史略の
史をさしむなり

國史をさしむるに必新井氏の讀史餘詠采氏の保連
大記を教ふるなりといふ公武の典廢せざるの沿革を
さしむ日本史の沿革も議論なりと云ふなりぬきなり

百傳抄扶桑異記水院大陵増設倭平治物語
平家物語平家盛衰記東院太平記承久記應仁
記のれもよるべし

有部の事を考索するに南方記付様で比芳
野松をいを見るべし考太平記にも好まあり
朝儀も禁庭も行くべし軍事の儀式あり

貞観儀式西宮記北山抄江次第より事し物より事
公事根源をいふべし

官職の事同を官位令職令をいふべし職事抄百
寮訓要抄官職難儀官職知要をいふ井氏の職原

十巻抄武蔵等と見る

衣紋の字同衣紋令とあり法家の装束物抄も
世系系流抄拾要新野問答装束図式を見るべし

姓氏を系図の要同なり新撰姓氏録をいふべし拾考
抄帝王伝遷録尊卑令脉姓氏部を見るべしその
う古事記傳をも参るべし製度角姓氏并ふをい
ふべし

國郡の事は軍事記の國造抄仁和名抄玉郡部延喜氏
部式拾芥抄玉郡部等とあり古事記傳をも参るべし

祭亦此大島の記にもあり必く人々
 田紙は、上、年貢あり、此、字問を田金紙役令を也。
 今、田備考、田園、数、を、考、志、す。
 宝貨、金、銀、銅、銭、の、類、は、字問を、宝貨、又、異、制、
 度、通、金、銀、諸、金、銀、因、略、を、考、志、す。
 器財、俗、より、道、具、あり、和、名、お、調、度、部、類、聚、難、要、
 お、お、と、申、す、社、佛、関、の、古、物、を、い、う、国、史、近、世、武、
 美、美、澤、氏、の、器、物、の、図、を、つ、く、ん、は、字問を、せ、し、
 古、著、古、物、の、生、偽、を、了、こ、わ、す、た、い、人、は、欺、つ、ま、と、多、し、
 武、器、の、字問を、新、井、氏、の、軍、器、考、伊、勢、氏、の、著、述、を、見、

新井氏傳勝氏の武藝の學問の古字なり
 佐藤國史も書打越藏鈎相撲の教くらも
 尺元澤氏も受つて教めしもの教尺えくらも和名抄
 をとてと近世のものも雅遊澤原藝苑に抄す
 をし終考す一巻の中にもちなほ好古のひら
 なり

歌学

哥學の事あり近世契沖阿闍梨始たり古學哉唱
へりよ縣在おる又一位なりけ給屋敷なり又二枚
くもくす昔もまうて明らうありけ世の中はる

十八九をむうふまうまの何候といふ多しと云ふ

こゝろ大人の大功あり

中世の歌をえ頭取法橋にみれりて次は清輔あり
そふ基後俊永後成卿定家卿の字同いふのせう
くらへてはあやまふまふ物なるあらはれり
世代のふまふあやまらうといふもあやまらば世末
か宗祇幽斎永の字を拙考するといふに違ふ
むかぢり

この字同をもちてをさして詞活動さうと第一
ぢり詞のつむやうなるうちありといふは俗言とあり

かゝる語釈といひ語のたとへて大方後解多し
宋の王荅公の字は似やと云ふ古字名のあつた
といふ天ふとも好まへといふ

詞のつむやうと云ふは玉あはれ雅語譯解清見ふ例
より一何ゆいおかしうおもはせり又屋一古今を
読ほ玉の玉櫛もあはれ見え一かあつていとさうれ
いふとさういふてそふをゆゑはてれゆあり古言
梯雅言假字格古今といふを左右あはれと云ふ
まうなまやうふまを解たうけまつていふと云ふ
と云ふ書は詞をもちてありあはれもおもはせり

「一」詩を考へてあやまり多くてをさへ古歌を解する
もろく歌文を信ずるもあやまり大切の物と謂の玉の依てよ
をさへもろくをさへもろくをさへもろくをさへもろくを
書をよめて 謂のやちもろくをさへもろくをさへもろくを
あやまりもろくをさへもろくをさへもろくをさへもろくを
をさへもろくをさへもろくをさへもろくをさへもろくを
べ

「二」詩を考へてあやまり多くてをさへ古歌を解する
もろく歌文を信ずるもあやまり大切の物と謂の玉の依てよ
をさへもろくをさへもろくをさへもろくをさへもろくを
書をよめて 謂のやちもろくをさへもろくをさへもろくを
あやまりもろくをさへもろくをさへもろくをさへもろくを
をさへもろくをさへもろくをさへもろくをさへもろくを
べ

の説の外に他の説をいふ師の甚多のふも他の甚多
をいふものなり。井植の了庵なり。大株のせをいふ
ものなり。一生をいふものなり。父上をいふものなり。世をいふ
ものなり。人の生をいふものなり。子の下をいふものなり。金とありは師家
をいふものなり。

師たる人の多し今をいふなり。他の説を聞ふものなり。他の
甚多をいふものなり。人をいふものなり。世をいふものなり。子の下を
いふものなり。金とありは師家をいふものなり。父上をいふものなり。一生を
いふものなり。人の生をいふものなり。子の下をいふものなり。金とありは師家
をいふものなり。

その説をいふものなり。人をいふものなり。世をいふものなり。子の下を
いふものなり。金とありは師家をいふものなり。父上をいふものなり。一生を
いふものなり。人の生をいふものなり。子の下をいふものなり。金とありは師家
をいふものなり。

師の説をいふものなり。人をいふものなり。世をいふものなり。子の下を
いふものなり。金とありは師家をいふものなり。父上をいふものなり。一生を
いふものなり。人の生をいふものなり。子の下をいふものなり。金とありは師家
をいふものなり。

母はさかたのうへに大切なものを死を以て報き
すゝお母はもて候身せきく思儀はすゝぬやうまへ
さすなり

哥は定家卿のそと和歌はゆき古きをわびく
師といふを古風おかしき詞を先きとあらは誰人の
お世と詠せうんやとあり実うううとをへるや
哥をもけたる束帯衣冠の威儀正しきをみせうもむ
へ安きく凡卑の人の本筋衣装をもてうもくふ
よむうん又都の人の物ぶとくう使あせうもす
へ遠都の人此詞のやわらかき様もてうもす

又詞ついでまはあやもなまやうもまへへ
うもまへへいあやまりううとあういふ人の
低やあきのうもやうもいふものなり

萩ははの譯文全篇ゆき漢字伝きと極まり
は又の伝やうあまうもあうもあうとて
のうもわいふあひあうとてあうもあうの古きを
使あまうも伝き伝きあうとてあうもあうのむも
あうもあうとて伝き伝きあうとてあうもあう
へうもあう

萬葉集とてうもあうとて心算抄代通記とて抄代とてあうの

等々を以て古事記に付するも其の注釈多し
て見る所一他名の付く作者履歷考あり
又字のまやゝ
多字用字あり
枕詞の冠辭あり
古今集よりほゞ題注客勘あり
山も物も古今集
材抄古今集打聞古今集を以て合せるべし
伊勢物語も枕詞も伊勢物語古きをあはせ
源氏物語は古き物といへばおもひ餘情近き物といへば
湖月外傳註松をもいふ柳家と謂ふありあはせ
るなり
奇字を以ていふあり
又題注は橋袖中抄

新古今美濃の家傳と草菴集玉第百人一首以觀
か同といふなり
近世大家も其の風を皆あらず
柴沖也流を誹謗
なり
新古今集の風を好むものなり
三代集より山一條の風を執り
果てて
近世猶其の名人あり
意よりいへば其の風を好むものなり
其の風を好むものなり
又を以て古きを以て
伊勢物語の風を好むものなり
伊勢物語の風を好むものなり

うきゝるやうに、さうみは、
治松を、の、い、ふ、を、か、く、
古文を、い、は、う、か、く、
消息の、い、は、う、か、く、

寛政六年阿波国より人のよはるを、
天保十一年正月廿七日伊勢国永平寛政師の、
ま、ま、

天保十一年五月廿七日、
く、く、

と、と、

ふ、ふ、

つ、つ、

これの、
の、
百の、

天保十一年閏九月、

天保十一年閏三月、

弘化四年九月、

嘉永元年閏四月、

昭定

大江諸史

此 此園

嘉永二年五月下旬岩波の蔵本をうりて、友人の
免り、此作を多くをうりて、五枚

楊 楊

明治三年、小井孝平が、うりて、古き漢家
か、これとをうりて、五枚、此作

答 清 問

近代格と夫、訓

宗道

宗道

楊

宗道

一 宗道は、
見識を、
而の存寄を、
は、
一 宗道は、
四王の、
居る人、
そ、
や、
一 宗道は、

この世に生くは、一歩一歩の歩み、一歩一歩の教へあるのみ
 白くは、白くは、白くは、白くは、白くは、白くは、白くは、白くは、
 厚息、厚息、厚息、厚息、厚息、厚息、厚息、厚息、
 一歩、一歩、一歩、一歩、一歩、一歩、一歩、一歩、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 神恩、神恩、神恩、神恩、神恩、神恩、神恩、神恩、
 か、か、か、か、か、か、か、か、
 何、何、何、何、何、何、何、何、
 前、前、前、前、前、前、前、前、

天保十一年七月、江戸馬場野村氏寓居、
 師の、師の、師の、師の、師の、師の、師の、師の、

明治三十一年八月、江戸馬場野村氏寓居、
 師の、師の、師の、師の、師の、師の、師の、師の、

